

グローバル人材育成のための英語教育と 習得目標となる英語に関する考察

五十嵐 優子

1. はじめに

文部科学省（文科省）は、様々な目標を掲げて英語教育を実施している。例えば、小学5・6年生を対象に英語でのコミュニケーション力育成を目標とした教育を2011年に始め（文科省、2011）、2012年からは「国際社会で英語を使って活躍するグローバル人材を育成すること」を目指している（文科省、2012）。ここから、国際社会で使用されている言語は「英語」であると文科省は認識し、日本人がそこで活躍していくためには十分な英語力を持っている必要があると考えていることが分かる。

しかしながら、この認識には「英語」が単一の言語として取り扱われているという大きな問題点がある。英語のみならず全ての言語には多様な変種が存在し、それぞれが独自の言語学的特徴をもっており、話者にとって各変種は自分たちのアイデンティティを形成するための重要な要素となっている。例えば、フィリピンの上流階級では「Conyo English」が使用されている。Garvida（2012）は、上流階級の人々がこの変種を使用することで、タガログ語しか話さない下層階級の人々とは異なることを強く認識する材料となっている状況を示した。また、ニュージーランドでは、19世紀に多くのイギリス人が入植したが、国の発展に伴い原住民の言語であるマオリ語の影響が英語に見られるようになっていった。そしてこのイギリス英語と自分たちの英語との違いが、「ニュージーランドはイギリスとは異なるもの」という認識につながり、今ではニュージーランド英語はニュージーランド人としてのアイデンティティを構成する重要な要素と捉えられている（Gordon & Deverson, 1998）。

現在、世界各地で多様な英語が使用されているが、Kachru（1985）はこれらの英語を Inner Circle（イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド）の英語、Outer Circle（公的機関での英語使用が根付いている Inner Circle 国の植民地を経験した国／地域）の英語、そして Expanding Circle（上記に含まれない国／地域）の英語と区分けした。

日本人を含めた多くの外国人英語学習者は、現在、Inner Circle の英語を学んでいる。しかしながら、国際ビジネス等で使用されている英語は、必ずしも Inner Circle のものとは限らない。もちろん英語母語話者同士の会話では Inner Circle の英語が使用されているが、非英語母語話者同士の会話では Inner Circle のものにはない特徴を持った英語が使用されている (Hino, 2012, Maley, 2010, Pedrazzini & Nava, 2010)。よって、日本人大学生が国際社会で活躍するグローバル人材となることを目標とする場合、Inner Circle の英語のみならず、様々な英語に対応できる能力を身につける必要がでてくる。また、国際社会では実際に Inner Circle 以外の英語を使用する人々も数多く存在していることから、日本人がアメリカ英語／イギリス英語を話す必要は全くなく、日本の英語教育における習得目標もアメリカ英語／イギリス英語である必要がなくなってくる。では、どのような英語を習得目標にしたらよいのだろうか。本稿では、この問題を考察していく。

現在、日本では多様な英語の使用状況を反映した英語教育を実施し、日本人大学生をグローバル人材として育成することが求められている。そしてこれは、世界的なレベルでも起こっている。多くの研究者は、英語の多様性を教育にどう反映させていくべきなのかを検討しており、その一環として English as a foreign language (EFL) 学習者用教科書の内容調査を実施している。例えば、Shin, Eslami, and Chen (2011) は、海外の大手出版社から刊行されている 7 種類の EFL 教科書の内容を調査した。その結果、これらの教科書では Outer/Expanding Circle の文化も紹介はされているが、Inner Circle の文化を主に取り扱っていること、また教科書は文化を紹介し情報を与えるという伝統的な手法で構成されているが、学習者が教科書の題材を深く考えて自分の意見を述べるというような作りにはなっていないことを示した。そこで Shin, Eslami, and Chen は、将来的に EFL 教科書には、(1) 文化に関する単純な情報を掲載するだけでなく、学習者が深く考えられるような各地域の特有な価値観や考え方などを載せる、(2) Inner Circle の英語のみならず Outer/Expanding Circle の英語も紹介する、そして (3) 学習者自身の国での価値観や考え方も掲載することを主張している。また Cortazzi and Jin (1999) は、教科書には (1) 自国の様々な情報、(2) Inner Circle の情報、(3) 国際的な立場からの様々な国の情報という 3 種類の情報の掲載を薦めている。

上記の研究では、EFL 教科書の内容を分析して英語の多様性にどう対処していったらよいのかを考察していた。本稿では、日本の英語教育が英語の多様性にどう対処していったらよいのかを、学生の考えを交えた視点から考察していく。そこでまず、EFL 学習者が英語の多様性にどう対処していったらよいと考えているのかを調べるため、2018 年にアンケート調査を実施したが、この調査結果を紹介する。そしてこれらを踏まえて、学生に多様な英語に対応できる能力を身につけさせるにはどのような内容の英語教育が必要となるのか、また特にグローバル人材となることを目標としている日本人大学生はどのような英語を習得目標としていくべ

きなのかを考察し、更に本調査の結果から見えてきた課題についても言及していく。

2. World Englishes, English as a Lingua Franca (ELF)、 and English as an International Language (EIL)

国際社会では様々な背景を持った話者により多様な英語が使用されている。しかしながら、EFL教科書はアメリカ英語かイギリス英語で書かれており(久保田、2018)、これらが習得目標となっている。社会言語学や英語教育の分野では、アメリカ英語／イギリス英語を含めたInner Circleの英語を学習者の習得目標とすることに對し異議を唱える研究者や教育者が増えてきている。例えばCanagarajah(2007)は、「Inner Circleの英語を学習者の習得ターゲットとするのではなく、世界で使用されている様々な英語とその使用者の多様性に適応できる能力を養う教育が必要である」と主張しているが、この主張の背景には世界での多様な英語使用の現状と共に、「英語母語話者中心主義」の存在が関係している。英語母語話者中心主義とは、アメリカやイギリスの中流階級に属する白人が使う英語が正当で、これを習得目標とする考え方であるが、日本人は一般的にこの考え方を強く持っていることが研究によって示されている(例えば、Houghton, Rivers, & Hashimoto, 2018, Kachru, 1997, Kubota, 1998, Kubota & McKay, 2009, Matsuda, 2003b)。そしてInner Circleの英語を習得目標とした場合、英語母語話者中心主義の問題に加えて、1) 英語と英語話者の多様性に敬意を払わなくなり、2) Inner Circle以外の英語を劣ったものと認識してしまう可能性が高くなり、3) これらの多様性に対応できる能力を習得する可能性も低くなるという問題も生じてくる。日本人が多様な英語が使用されている国際社会でグローバル人材として活躍していくためには、アメリカ英語／イギリス英語以外の英語も正当で劣るものではないとの認識を持ち、英語とその使用者の多様性に敬意を払うことが必要となり、よってInner Circleの英語を習得目標とするのは不適切ということになる。ではInner Circle以外で日本人の習得目標となり得る英語には、どのようなものがあるのだろうか。

そこで単純に候補として挙げられるものはOuter/Expanding Circleの英語であろう。しかし、Outer/Expanding Circleの中のある特定の国や地域の英語を選択した場合、その英語にステータスが与えられ、他の英語は劣ったものという見方が新たに生まれてくる可能性がある。これは多様な英語全てが同等であると考えられるWorld Englishesの考え方に反する。Inner CircleのみならずOuter/Expanding Circleの英語についても、この中の変種を英語学習者の習得目標とすると問題が生じてきてしまう。そこで特定の国や地域とは関連のないグローバルな視点から考えられた変種を候補とするべきで、このようなものとしてEnglish as a lingua franca (ELF) や English as an international language (EIL) がある。

ELF は、基本的に非英語母語話者同士の会話で使用される英語変種のことであるが、最近では英語母語話者と非英語母語話者との会話での英語も ELF と見なされることがある (Ur, 2010)。ELF は英語学習者の習得目標となるように考えられた変種ではなく (Jenkins, 2006)、英語を既に習得している話者たちが使用するそれぞれの母語からの影響がみられる多様な形態をもった言語と理解されている (Canagarajah, 2007、Meierkord, 2004)。

EIL は、国際社会で使用している特定の国や文化とは関係なくニュートラルに機能する非英語母語話者が使用する英語で (McKay, 2018)、英語学習者の習得目標となり得る変種である。EIL を ELF と同じものとして扱う研究者 (例えば、Kirkpatrick (2007) や Rubby and Saraceni (2006)) もいる (Maley, 2010)。EIL 習得のための授業では、言語の習得のみならず、他国の文化を学んで「自分と異なること」に敬意を払い、自分たちの文化に対する理解も深め (McKay, 2018)、柔軟にふるまえるコミュニケーション力を身につけることを目標としている (Meyer, 1991)。

上記のことから、グローバル人材として国際社会で活躍したいと考える日本人が習得目標とする英語は、EIL となるだろう。しかしながら、EIL は「国際社会で使用されている英語」という概念であり、現時点では「これが EIL の言語学的な特徴 (文法、音声、語彙) である」と言えるものがないため、現場で実際に英語を教えている教員は EIL の考え方に理解は示すが、教材を容易に入手できて明確な形態を持っているアメリカ英語／イギリス英語を学習者の習得目標としている場合が多い (Dogancay-Aktuna & Hardman, 2018)。よって、どのような英語を日本人大学生の習得目標とするべきなのかをきちんと考察する必要がある。本稿ではこれについて、多様な英語に適応するための日本で実施すべき英語教育の内容を考察した後、考えていく。

3. 調査対象者と調査方法

筆者は、EFL 学習者の視点を交えながら英語の多様性にどう対処していったらよいのかを考えるため、2018年に日本の大学の社会科学系の学部 に所属する1年生39名を対象にパイロット・スタディを実施した。調査被験者は全員、intermediate レベル (TOEFL ITP 440-480) のクラスに在籍している。この社会科学系の学部は国際政治・経済・文化等の科目を学生に学ばせることで、社会科学分野の高度な専門知識を習得させることを目指しているが、これと同時に「海外の大学に留学する学生を増やすこと」と「グローバル人材の育成」も大きな目標として掲げ、これを実現するため英語教育に力を入れている。この学部の1年生は全員、英語4科目を必修科目として1年間履修し、そこでアカデミックなリーディングとライティングを学ぶ。リーディングの授業では、社会科学に関連のある教材を読み、内容を深く理解する力・内

容の構成を分析する力・批判的に考える力を育成し、論理性や思考力を養う。ライティングの授業では、自分の考えをエッセイにまとめたり、リサーチペーパーを書くことを目標にしている。そしてリーディングとライティングの両方の授業ではプレゼンテーションやディスカッションを多く取り入れ、スピーキング力を養うことにも努めている。

このような背景の学生を対象にアンケート調査を実施したが、その質問事項は下記の5つである。

- (1) グローバル人材として英語を使って国際社会で活躍したいか？
- (2) 日本人は多様な英語に対応できる能力を持つ必要があると思うか？
- (3) アメリカ英語とイギリス英語以外でどのような英語を聞いたり読んだりしたことがあるか？それらを理解できたか？
- (4) 英語の教科書に様々な英語の特徴（語彙、文法、発音）についての説明を掲載するべきか？
- (5) アメリカ英語とイギリス英語以外の英語を理解できるようになるには、どうしたらよいか？

質問（1）（2）（4）は「はい」「いいえ」で回答する問題で、質問（5）は自分の考えを回答するものとなっている。質問（3）では、被験者は英語の変種名を挙げた後、理解できたかどうかを「はい」「いいえ」で回答した。この調査で使用するアンケートは、筆者がオンライン上に作成した。被験者はコンピューターでそのアンケートにアクセスして、質問事項に回答した。そして全回答はオンライン上で自動的に回収・集計された。

4. 調査結果

ここでは、本調査の結果を図と表を使って紹介していく。まず最初の質問は「グローバル人材として英語を使って国際社会で活躍したいか」で、下記の図が被験者の回答を示したものである。

図1 グローバル人材になりたい

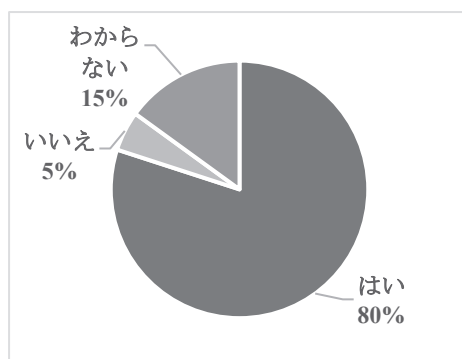


図1では、80%の学生がグローバル人材として国際社会で活躍したいと考えていることが示されており、ここから非常に多くの学生がグローバル人材を目指していることが分かる。この回答の数字の高さは、彼らがグローバル人材の育成を目標に英語教育に力を入れている社会科学系の学部には籍を置いていることにも関連していると考えられる。

次の質問は「日本人は多様な英語に対応できる能力を持つ必要があると思うか」で、その回答は下記の通りである。

図2 多様な英語に対応できる能力を持つべきだ

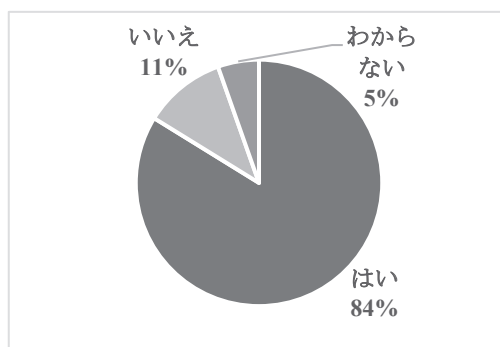


図2が示すように84%の調査被験者が「はい」と回答していることから、多くの学生は国際社会で活躍するには多様な英語に対応できる能力が必要だと認識していることが分かる。

三つ目の質問は「アメリカ英語／イギリス英語以外の英語でどのような英語を聞いたり読んだりしたか」で、被験者にはその英語の変種名を挙げてもらった。表1はその結果を示している。

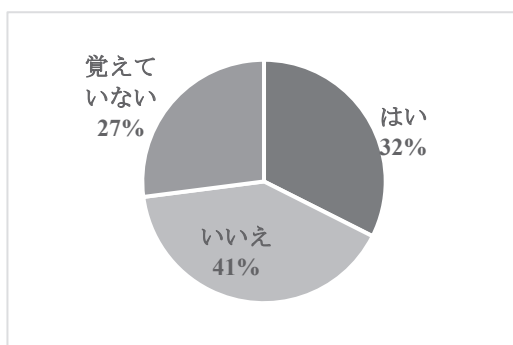
表1 アメリカ英語とイギリス英語以外で聞いたり読んだりした英語

Inner Circle の英語	オーストラリア、ニュージーランド、カナダ
Outer Circle の英語	インド、フィリピン、アフリカ、シンガポール
Expanding Circle の英語	アフリカ、韓国や中国を含むアジア、ヨーロッパ、中東

表1が示すように、被験者は Inner Circle のみならず、Outer/Expanding Circles の英語を挙げている。ここから、彼らは実際にアメリカ英語／イギリス英語以外の英語に遭遇していることが分かる。彼らが様々な英語に遭遇している機会としてまず挙げられるのは、教科書だろう。日本の学校教育は、アメリカ英語／イギリス英語で書かれた教科書を使用しているが、最近ではこれ以外の英語も教科書に紹介されている。教科書以外でアメリカ英語／イギリス英語以外に出会う機会としては、Assistant Language Teacher (ALT) の存在が挙げられる。1980年代より文科省が実施する英語教育政策の一環として多くの中学校や高校に ALT が配属されることになったが、ALT による英語教育が定着した結果、中学生・高校生は授業で外国人と実際に英語を話す機会を持った。そして被験者が ALT を介して遭遇した英語は、表1のリストから Outer Circle の英語の場合もあったということが推察できる。実際のところ、Japan Exchange and Teaching Programme (JET) が発表している ALT の出身国別リストに、Outer Circle の国から採用された ALT がいることが示されている (JET, 2019)。しかしながら、被験者は Expanding Circle の英語も挙げているため、彼らは教科書や ALT 以外にも英語に触れていると言える。そこで、その他の英語に触れる機会としては、地域や個人レベルでの国際交流や報道・広告・映画・音楽等があり、これらで被験者は様々な英語に遭遇していると考えられる。

次に、英語の変種を聞いたり読んだりした時にそれらを理解できたかどうかを尋ねたが、図3はその結果を示している。

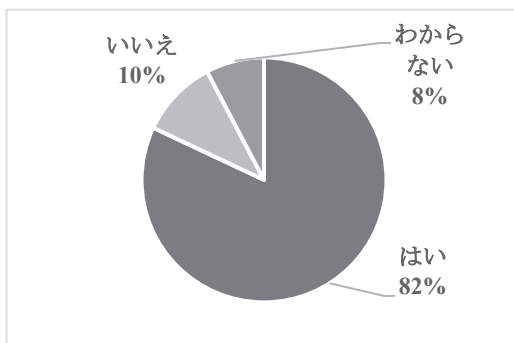
図3 アメリカ英語とイギリス英語以外の英語を理解できた



上記の図が示すように、41%の被験者がアメリカ英語／イギリス英語以外の英語を理解できなかったと回答していることから、1/3強の学生が理解できなかった経験をしていることが分かる。

5つ目に「英語の教科書に様々な英語の特徴（語彙、文法、発音）についての説明を掲載すべきかどうか」を尋ねたが、下記がその回答を示した図である。

図4 教科書に様々な英語の特徴についての説明を載せる



上記の図から、本調査の被験者の82%は多様な英語の言語学的特徴（語彙、文法、発音）をEFL教科書に掲載すべきだと考えていることが分かる。この結果から、被験者は様々な英語を教科書から学びたいと考えているとも言える。

最後に「アメリカ英語とイギリス英語以外の英語を理解できるようになるには、どうしたらよいか」という質問をし、表2のような回答を得た。

表2 多様な英語の理解に必要なこと

①	聞き取る力をつける	65.4%
②	違いを学ぶ	15.4%
③	語彙を増やす	7.7%
④	ゆっくりと話してもらう	7.7%
⑤	英語力を上げる	3.8%

上記の表が示すように、約65%の被験者が聞き取る力をつけることが必要と考えており、次に多く挙げられた「違いを学ぶ」の約15%とかなりの差がついている。この表2の回答は、大きく3つに分類できる。1つ目は会話時に必要なこと（①と④）、2つ目は言語学的な比較から知識を蓄えること（②）、そして3つ目は英語力の向上について（③と⑤）である。この中でも特に「会話時に必要なこと（①と④）」に、多くの被験者は注目していることが示されて

いる。

これらから、学生は、英語教育ではアメリカ英語とイギリス英語以外の英語も積極的に取り入れ、様々な英語を聞くことで多様な英語に対応できる聴解力を養い、更にそれぞれの英語の特徴を教わることで学習者が他との違いを理解できるようになると考えていると言える。そして、会話時に必要なことを重視している傾向が見られる。

5. 考察

2018年に実施したパイロット・スタディの結果から、本調査の被験者の多くは英語を使って国際社会で活躍したいと考えており、そのためには多様な英語に対応できる英語力を持っている必要があると認識していることが明らかになった。また、被験者はアメリカ英語／イギリス英語以外の英語を聞いた時に、それらを理解できなかったことから、聴解力とその他の会話で必要となる能力を養う必要があり、様々な英語の言語学的特徴（語彙、文法、発音）をEFL教科書に掲載するべきであると考えていることも示された。これらの結果を踏まえて、ここではグローバル人材として日本人大学生を育成するための英語教育の内容と習得目標となる英語について考察していく。

5.1 グローバル人材育成のための英語教育

グローバル人材を育成するため、ここではEFL教科書の内容について考えていく。教科書に着目するその理由は、Expanding Circleでは、英語が人々の日常で使用されることがないため、学習者にとって教科書は英語についての貴重な情報源となっているからである（Bardovi-Harling, 1996）。また日本では英語を学習する場合、EFL教科書を使って学ぶことが伝統的に行われてきており、教科書が英語習得において大きな役割を果たしている。日本の大学では海外の大手出版社から刊行されたEFL教科書を使用していることがよくあり、それはアメリカ英語／イギリス英語で書かれているという大きな特徴があるが、これ以外にも教科書の内容に関して下記のような特筆すべき点がある。これらを踏まえて、ここでグローバル人材育成のための教科書がどのような内容を含んでいるべきなのかを考えていく。

まず一つ目の現在使用されているEFL教科書の特徴は、「文化」に関するトピックを多く取り扱っていることで、それは「文化と言語」は切っても切れない関係にあるためである（Byram, 1989, Cortazzi & Jin, 1999, Dogancay-Aktuna & Hardman, 2018, Kramsch, 1993）。言語を学ぶということは、その言語を話す話者の文化と世界観を学ぶことでもある。「文化」を取り扱う上で重要な点は、英語母語話者中心主義を学習者に持たせないように注意深く教えていくことだと考える。英語母語話者中心主義を持った学習者は、Inner Circleの英語や

文化のみに関心を示す傾向が強くなる可能性があるが、これは国際社会で様々な英語を話す人々とコミュニケーションを図るグローバル人材が持っているべき考え方ではない。ところが、現在刊行されている EFL 教科書には、Outer/Expanding Circle についての文化も取り上げられてはいるが、未だに多くのページが Inner Circle の文化に割かれている (Lee, 2011, Matsuda, 2002, 2003a, Shin, Eslami, & Chen, 2011, Stranger-Johannessen, 2015)。日本人大学生がグローバル人材として成長するために、教科書には Inner Circle のみならず Outer/Expanding Circle (日本も含む) の様々な文化に関する情報を掲載する必要があるだろう。

また本調査の被験者は、自分たちが学校で学んできた英語とは異なる英語に遭遇し、その英語を理解できなかったため、多様な英語に対応できる聴解力を身につけたり、それぞれの英語の違いを学ぶ必要があると感じている。従って、EFL 教科書では、Outer/Expanding Circle の英語の言語学的特徴も扱う必要がある。Field (2005) は、学習者が英語を聞き取る上での重要な要因の一つが親密度であることを示した。よって学習者が様々な英語を学習する場合、発音に対する親密度を高められるよう「聞く」という訓練を数多く実施していくことが必要となる。更に、他人の英語の発音を理解することの難しさに気づくことにより、他の英語話者にとって自分たちの英語も理解しづらいという認識を持つことにもつながる (Davis & Patsko, 2013)。この認識により、お互いの英語を尊重することの大切さを学ぶことができるようになるだろう。

二つ目の特徴は、EFL 教科書で扱われている「文化」に関する内容は、学習者が容易に理解できる「foods, fairs, folklore, statistical facts」という 4 つの F で表されるもので (Kramsch, 1991)、教科書はこれらの情報を学習者にただ単に与えることで「文化」を学ばせている場合が多い (Sercu, 2002)。しかしこの手法による学習では、「文化」を表面的なレベルで理解することに留まり、これでは学習内容が定着しないとの研究結果がもたらされている (Sercu, 2002)。国際社会で活躍できる人材として大学生を育成する場合は、学習内容を定着させるためにもっと深いレベルで「文化」を理解させることが必要であろう。そのためには、下記の能力を養えるような課題が有効となる (Sercu, 2002)。

- (1) 与えられた情報を分析する能力
- (2) 与えられた情報を批判的な観点から考える能力
- (3) 自分たちの文化と他者のものとを比較し、違いを認識する能力
- (4) 問題に対し最適な解決方法を見つけ出す能力

これらが、日本人をグローバル人材として育成するための教科書に含むべき情報や課題である

と考える。

また、日本人が国際社会で多様な背景を持った人々とうまくコミュニケーションを図っていくために必要となる技能も英語教育で育成するべきであろう。McKay (2002) と Widdowson (1998) は、英語学習者は英語母語話者と非英語母語話者との会話・非英語母語話者同士の会話での適切なコミュニケーションの仕方を学ぶ必要があると主張している。このコミュニケーションの仕方としては、「分からないことを聞き返す」「同意や反対の意見を言う」「会話の順番に注意を払う」「会話を適切に終わらせる」といった会話のマネージメントや、無礼な態度をとらないこと・相手をイライラさせたり不快にさせないように振舞うことが含まれる (McKay, 2002, 2018)。そしてコード・スイッチングや言語スタイルの変換を実際に体験することも重要となる (Canagarajah, 2006)。これらを授業で網羅することで、英語学習者は、様々な背景をもった人々とうまくコミュニケーションを図るための方法を社会言語学的な観点から学び、自分と相手との文化の違いから生じる差を小さくできるように努めていこう (McKay, 2002, 2018)。よって、EFL 教科書には、これらを学べる内容も取り入れる必要がある。

更に学生に対する評価方法についても触れておく。今まではアメリカ英語／イギリス英語により近い英語を使えるかどうかを英語教育では評価していた。しかし、英語とその使用者の多様性に対応できる能力を身につけるための教育では、会話のマネージメントが適切に行えるかどうか、多様性と共存することの必要性を認識できているかどうか、会話している相手とよい関係を築けているか、自分の文化との違いから生じる差を小さくできているかといった社会言語学的な側面から学生を評価することが必要となり (Canagarajah, 2006)、教員はこれらを評価できるよう訓練されていなければならないことになる。よって、グローバル人材を育成するための英語教育は、今までのものとはかなり異なるものとなる。

5.2 習得目標となる英語

本稿では、グローバル人材を目指す日本人大学生は、国際社会で活躍するために多様な英語使用状況に適応できる能力を養う必要があり、これを育成するために「Inner Circle の英語を習得目標としない教育」の実施を主張し、そのための EFL 教科書の内容を考察してきた。次に、彼らが習得目標とするべき英語はどのようなものなのかを考えていく。

習得目標英語の候補として Kachru の 3 つのサークルに属さない EIL の存在を前述したが、EIL は教科書にその形態を掲載することができない。そこで Dogancay-Aktuna and Hardman (2018) は、次の 2 つの目標を提案している。

(1) アメリカ英語／イギリス英語を自分たち独自の英語を確立するための手段として扱い、そ

これから最終的に国際社会で通用する自分たちの英語を確立する。

(2) 非英語母語話者ではあるが英語に精通している人の英語をモデルとする。

ここで、どちらの提案が日本人の習得目標として適切なのかを考えていく。

上記(1)の提案に対しては、インド英語やシンガポール英語という実例がある。これらの地域では、植民地政府の管理の下、英語が公的な機関で使用されることで定着していき、その使用が社会全般に広まって、英語が社会で重要な役割を担うような状況が作られていった。そしてその結果、自分たち独自の英語が発展していき、確立されたと考えられる。現在、Outer Circleの英語は、その国独自の言語学的・社会言語学的特徴を持っており、それぞれの国での標準英語として採用するかどうか、また英語学習者の習得目標とするかどうかの議論が起こるまでに成長している。Expanding Circleに属する日本の場合、Yano(2001)が説明している通り、公的機関で英語が使用されることがないため、日本の社会における英語は外国語としての使用に留まっており、これが日本独自の「日本英語」であるという変種は存在していない。文科省は英語教育政策を実施し、英語が使える日本人を数多く育成しようと努めているが、これは個人レベルのバイリンガルを育成する政策であって、公的機関での英語使用を推進して社会全体をバイリンガルに変換する政策ではない。そのため、英語が社会全体に広がり、一般の人々のコミュニケーション言語になっていくとは考えにくい。もし将来、日本の社会全体に英語使用が広がった場合、「日本英語」という変種が確立されるかもしれないが、英語が個人レベルでの使用に留まっている限り、「日本英語」が確立されることは難しいだろう。よって、今の段階では「日本英語」を日本人の習得目標とするには無理がある。

そこでもう一つの習得英語の選択肢として、「非英語母語話者の英語を習得モデルとする」がある。これに関しては、何人かの研究者がモデルを示している。例えば、Hino(2012)は英語に精通している日本人の英語教員が使用している英語をモデルとして提唱している。また Honna and Takeshita(2014)は、日本の教育機関において今までと同様にアメリカ英語／イギリス英語を使って日本人を教育していくが、アメリカ人やイギリス人が話す英語を習得目標とするのではなく、日本人独自の発音や表現を持った英語が使えるようになることを目標としている。

これらに倣い、本稿ではグローバル人材を目指している日本人大学生が習得目標とする英語として「国際社会で実際に活躍している日本人が使っている日本人であることが分かる特徴を持った英語」を提案する。これは、アメリカ英語／イギリス英語による教育を受けた日本人が使う日本語からの影響が見られる英語であって、英語母語話者の英語とは異なるものである。この英語を身につけるための教育として、EIL習得のための授業を行っていく。ここでは、他者を認識し、異文化を持つ人々と英語でうまくコミュニケーションを図れるよう学習する。

その結果、学習者は多様な英語とその話者に対して寛容な態度をとり、尊敬の念を抱けるようになることが期待できる。また、この授業で使っていく教科書は、アメリカ英語／イギリス英語で書かれたものであるが、これは Outer/Expanding Circle の文化について多くのページを割いたもので、日本についての内容も含まれている。そしてこの教科書は、掲載されている様々な「文化」を学習者が深いレベルで理解できるような課題と共に、社会言語学的な「会話のマネージメント」を体験できるような構成となっている。

「日本人であることが分かる特徴を持った国際社会で通用している英語」を習得目標とすることにより、日本人にとって大きな利点が生じてくる。それは、学習者が、アメリカ英語／イギリス英語を話さなくても日本人の英語で通用するのだという自信を持てることである。藤原(2013)は、日本の中学3年生155名を対象に英語の発音に関するアンケート調査を実施した。そこで「自分の発音が正しいかどうか自信がない」「英語の発音が悪いと人前で英語を話すのが恥ずかしい」「英語の知識や能力がある人でも発音が悪いと英語ができない印象を与える」といった認識を中学生が持っていることを示した。ここからアメリカ英語／イギリス英語の発音が正当で、正しい英語を話しているかどうか自信がないため英語を話すのが恥ずかしいという生徒たちの認識と態度が見えてくる。彼らはアメリカ英語／イギリス英語を習得目標とする教育によって、自分たちの英語に対して否定的な認識を持ってしまっており、中学の段階ですでに英語母語話者中心主義の弊害が起きていると言える。そこで、「日本人であることが分かる特徴を持った国際社会で通用している英語」を習得目標とする教育を実施することが非常に重要で意味のあるものとなる。それは、この目標を持つことにより、英語母語話者中心主義を軽減できる可能性が高くなるからである。

本稿で習得目標として提案している英語に関して、ここでは特にその特徴が聞き手にすぐに伝わる「話し言葉」に限定して考えていく。言語には話し言葉と書き言葉が存在している。書き言葉とは、辞書や文法書に沿った言葉で、公的な場所で使用するフォーマルな言語と理解されており、標準語がその基準となっている (Wiley & Lukes, 2016)。英語に関しても、標準英語が書き言葉の基準であると捉えられているが (Seidlhofer, 2007)、「話し言葉」の英語には標準となるものが明確には存在していない。よって、アクセントのある英語を話しても相手に理解してもらえれば特に問題にはならないと言え、それは次の実験結果によっても示されている。Orikasa (2016) は、37名の日本の大学1年生を対象にアメリカの大学・大学院に在籍しているアメリカ・中国・韓国・ベトナム出身の話者の英語が理解できるかどうかの実験を行った。その結果、被験者は、アメリカ人の女性の英語が一番理解できず、中国人の女性話者の英語を最も理解していた。Orikasa の調査の被験者は、様々な話者の英語が理解しづかった理由として、話すスピード（速いと理解できない）と知っている単語を使用しているかどうか大きいことを挙げている。一方でイントネーションやアクセントに関しては、被験者が学んで

きたものとは異なるが、理解できないほどではなかったという結果が示された。よって、日本語のアクセントやイントネーションがあっても相手が理解できる英語であれば問題はないと言える。

Jenkins (2000) は、非英語母語話者がコミュニケーションを取る時に、英語母語話者の発音に近い発音をしなければ理解してもらえない音声学的要素を「Lingua Franca Core (LFC)」として示し、これには1) 子音の発音、2) 子音の連続、3) 長音と短音の区別、4) 核の強勢の4つが含まれる。非英語母語話者がLFCを英語母語話者の音に近い発音をした場合、彼らの英語を理解してもらえる確率は高くなる。またこの4つ以外の音声学的要素を英語母語話者とは異なって発音した場合でも、彼らの英語を理解してもらえる確率は低くはないとしている。従って、「日本人であることが分かる特徴を持った国際社会で通用している英語」を習得する際には、LFCに関しては英語母語話者の発音に近くなるように教育していくが、それ以外の音声学的要素については日本語の影響が出ていてもあまり問題はないということになる。グローバル人材育成のための英語教育ではLFCに焦点をあてた発音の習得が重要で、アメリカ英語/イギリス英語の母語話者と同じ音声学的要素全てを習得目標とする現在の英語教育とは異なる日本人にとっては話しやすい英語が習得目標となる。

6. 本調査から見えてきた課題

本稿では、筆者が実施したパイロット調査の結果を紹介し、学生がどのような英語教育を受けたら多様な英語に対応できる能力を身につけることができるのか、そして特にグローバル人材となることを目標としている日本人大学生はどのような英語を習得目標としていくべきなのかを考察してきた。最後に、本調査の結果から見えてきた課題について言及する。

まず問題として浮かび上がってきたことは、文科省の英語に対する認識と現在の国際社会における英語使用状況にずれがあることである。文科省は英語を単一の言語として扱い、言語教育政策を実施してきているが、この認識は様々な英語を話す人々と国際社会でうまくコミュニケーションをとっていきけるグローバル人材を育成するための英語教育には合わないものとなっている。国際社会では多様な英語が使用されており、話者同士がお互いの英語に敬意を払い、自国と他国との文化の差を乗り越えながらコミュニケーションを成立させている。そして本調査の被験者は、英語の多様性を認識し、グローバル人材として成長するにはこれに対応できる英語力を持つことが必要であると考えている。学生は現在の多様な英語の使用状況を認識しているにも関わらず、文科省はそれをしていないのが現状である。文科省は、適切な英語教育政策を実施するために国際社会での英語使用の現在の状況を理解する必要があるが、文科省にこの理解をしてもらうにはどうしたらよいのか。これは、今後、考えていくべき課題である。

二つ目の課題は、アメリカ英語／イギリス英語を使って「日本人であることが分かる特徴を持った国際社会で通用している英語」を習得目標とする英語教育を実施する一方で、英語のライティング力の習得をどのように扱っていくかである。世界的なレベルで使われている英語の書き言葉は Inner Circle の英語を話す母語話者の中でも高い教育を受けた話者の書き言葉で、これはほぼ標準化されており、英語母語話者は正しい書き言葉がどのようなものなのかをしっかりと把握していることが多く（McKay, 2018）、国際社会においても、この標準の書き言葉を使用すべきであると考えられる人々が多く存在する（Seidlhofer, 2007）。従って、書き言葉に関して「日本人であることが分かる特徴を持った国際社会で通用している英語」を習得して国際社会で使用した場合、標準の「書き言葉英語」とは異なるため正しい英語ではないと指摘される可能性が高い。しかし標準の書き言葉英語を習得目標とする必要があるとなると、学生は「日本人であることが分かる特徴を持った国際社会で通用している英語」と標準の書き言葉英語の2種類を習得しなければならないことになる。また、日本の学校教育で習得目標とする書き言葉の英語は、Inner Circle の英語の母語話者が書き言葉として使用しているもので、これは話し言葉と同様に日本人学生に Inner Circle の英語が正しいとの認識と、英語母語話者中心主義を持たせることにつながってしまう。これらから、ELF/EIL の概念を書き言葉英語にも広げていくのかどうかを将来、考えていかなければならない。

グローバル化はますます進み、日本人が世界の様々な国を訪れ、また多様な背景を持った外国人が日本を訪れている今日、国際語の一つである英語を使えることは日本人にとって役に立つことであることは間違いない。日本人全員が英語を使えるようになる必要は全くないが、英語を習得したいと考えている人には、本稿で述べた「日本人であることが分かる特徴を持った国際社会で通用している英語」が现阶段では適切な習得目標であると考えており、そのために必要な教育を実施していけるよう、英語教育者・文科省・EFL教科書の出版社は「英語と英語使用者の多様性」をしっかりと認識しなければならない時期にきているのではないだろうか。

参考文献

久保田竜子（2018）『英語教育幻想』ちくま書房

Japan Exchange and Teaching Programme (JET) (2019) 「JET プログラム参加者数」

<http://jetprogramme.org/ja/countries/>

藤原愛（2013）「日本人英語学習者の発音習得に対するピリーフ」『育英短期大学研究紀要』第30号, 37-46

文部科学省（2011）「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf

文部科学省（2012）「資料2：グローバル人材の育成について」

- http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/_icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf
- Bardovi-Harlig, K. (1996). Pragmatics and language learning: Bringing pragmatics and pedagogy together. *Pragmatics and Language Learning*, 7, 21-39.
- Byram, M. (1989). *Cultural studies in foreign language education*. Clevedon, PA: Multilingual Matters.
- Canagarajah, S. (2006). Changing communicative needs, revised assessment objectives: Testing English as an international language. *Language Assessment Quarterly: An International Journal*, 3(3), 229-242. doi: 10.1207/s15434311laq0303_1
- Canagarajah, S. (2007). Lingua franca English, multilingual communities, and language acquisition. *The Modern Language Journal*, 91(Focus Issue), 923-939.
- Cortazzi, M., & Jin, L. (1999). Cultural mirrors: Materials and methods in the EFL classroom. In E. Hinkel (Ed.), *Culture in second language teaching* (pp.196-219). Cambridge: Cambridge University Press.
- Davies, K.S., & Patsko, L. (2013). How to teach English as a lingua franca (ELF). Retrieved from <https://www.britishcouncil.org/voices-magazine/how-teach-english-lingua-franca-elf>
- Dogancay-Aktuna, S., & Hardman, J. (2018). Teaching of English as an international language in various contexts: Nothing is as practical as good theory. *RELC Journal*, 49(1), 74-87.
- Field, J. (2005). Intelligibility and the listener: The role of lexical stress. *TESOL Quarterly*, 39(3), 399-423.
- Garvida, M.M. (2012). "Conyo talk": The affirmation of hybrid identity and power in contemporary Philippine discourse. *Lingue e Linguaggi*, 8, 23-34.
- Gordon, E., & Deverson, T. (1998). *New Zealand English and English in New Zealand*. Auckland: New House.
- Hino, N. (2012). Negotiating indigenous values with Anglo-American cultures in ELT in Japan: A case of EIL philosophy in the Expanding Circle. In A. Kirkpatrick & R. Sussex (Eds.), *English as an international language in Asia: Implications for language education*, (pp.157-173). Springer.
- Honna, N., & Takeshima, Y. (2014). English as an international language and three challenging issues in English language teaching in Japan. In R. Marlina & R.A. Giri (Eds.), *The pedagogy of English as an international language: Perspectives from scholars, teachers, and students* (pp.65-7). Springer.
- Houghton, S.A., Rivers, D.J., & Hashimoto, K. (2018). *Beyond native-speakerism: Current explorations and future visions*. New York: Routledge.
- Jenkins, J. (2000). *The phonology of English as an international language: New models, new norms, new goals*. Oxford: Oxford University Press.
- Jenkins, J. (2006). Current perspectives on teaching World Englishes and English as a lingua franca. *TESOL Quarterly*, 40(1), 157-181.
- Kachru, B.B. (1985). Standards, codification, and sociolinguistic realm: The English language in the outer circle. In R. Quirk & H. Widdowson (Eds.), *English in the world* (pp.11-30). Cambridge: Cambridge University Press.
- Kachru, B.B. (1997). Past imperfect: The other side of English in Asia. In L.E. Smith & M.L. Foxman

- (Eds.), *World Englishes 2000* (pp.68-89). Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Kirkpatrick, A. (2007). *World Englishes: Implications for international communication and English language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kramsch, C. (1991). Culture in language learning: A view from the States. In K. de Bot, R.B. Ginsberg, & C. Kramsch (Eds.), *Foreign language research in cross-cultural perspective* (pp.217-240). Amsterdam: John Benjamins.
- Kramsch, C. (1993). *Context and culture in language teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Kubota, R. (1998). Ideologies of English in Japan. *World Englishes*, 17(3), 295-306.
- Kubota, R., & McKay, S. (2009). Globalization and language learning in rural Japan: The role of English in the local linguistic ecology. *TESOL Quarterly*, 43(4), 593-619.
- Lee, I. (2011). Teaching how to discriminate: Globalization, prejudice, and textbooks. *Teacher Education Quarterly*, Winter, 47-63.
- Maley, A. (2010). The reality of EIL and the myth of ELF. In C. Gagliardi & A. Maley (Eds.), *EIL, ELF, Global English: Teaching and Learning Issues* (pp.25-44). Bern, Switzerland: Peter Lang.
- Matsuda, A. (2002). Representation of users and uses of English in beginning Japanese EFL textbooks. *JALT Journal*, 24(2), 182-200.
- Matsuda, A. (2003a). Incorporating World Englishes in teaching English as an international language. *TESOL Quarterly*, 37(4), 719-729.
- Matsuda, A. (2003b). The ownership of English in Japanese secondary schools. *World Englishes*, 22(4), 483-496.
- McKay, S.L. (2002). *Teaching English as an international language: Rethinking goals and approaches*. Oxford: Oxford University Press.
- McKay, S.L. (2018). English as an international language: What it is and what it means for pedagogy. *RELC Journal*, 49(1), 9-23.
- Meierkord, C. (2004). Syntactic variation in interactions across international Englishes. *English World-Wide*, 25, 109-132.
- Meyer, M. (1991). Developing transcultural competence: Case studies of advanced language learners. In D. Buttjes & M. Byram (Eds.), *Mediating languages and cultures: Towards an intercultural theory of foreign language education* (pp.136-158). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Orikasa, M. (2016). The intelligibility of varieties of English in Japan. *World Englishes*, 35(3), 355-371. doi10.1111/weng.12209
- Pedrazzini, L., & Nava, A. (2010). The ELF of English language teachers. In C. Gagliardi & A. Maley (Eds.), *EIL, ELF, Global English: Teaching and Learning Issues* (pp.283-300). Bern, Switzerland: Peter Lang.
- Rubby, R., & Saraceni, M. (2006). *English in the world: Global roles, global rules*. London, New York: Continuum.
- Seidlhofer, B. (2007). Common property: English as a lingua franca in Europe. In J. Cummins & C. Davidson (Eds.), *International Handbook of Language Teaching* (pp.137-150). London: Springer.
- Sercu, L. (2002). Autonomous learning and the acquisition of intercultural communicative competence: Some implications for course development. *Language, Culture and Curriculum*, 15(1), 61-74. doi:

10.1080/07908310208666633

- Shin, J., Eslami, S.R., & Chen, W. (2011). Presentation of local and international culture in current international English-language teaching textbooks. *Language, Culture and Curriculum*, 24(3), 253-268. doi: 10.1080/07908318.2011.614694
- Stranger-Johannessen, E. (2015). Constructing English as a Ugandan language through an English textbook. *Language, Culture and Curriculum*, 28(2), 126-142. doi: 10.1080/07908318.2014.987296
- Ur. P. (2010). English as a lingua franca: A teacher's perspective. *Cadernos de Letras*, 27, 85-92. Retrieved from http://www.lettras.ufrj.br/anglo_germanicas/cadernos/numeros/122010/textos/cl301220100penny.pdf
- Widdowson, H.G. (1998). Context, community, and authentic language. *TESOL Quarterly*, 32(4), 705-716.
- Wiley, T.G., & Lukes, M. (2016). English-only and standard English ideologies in the U.S. In T. Ricento (Ed.), *Language policy and planning: Vol. 3. Language policy in education* (pp. 106-129). New York: Routledge.
- Yano, Y. (2001). World Englishes in 2000 and beyond. *World Englishes*, 20(2), 119-131.

(五十嵐優子、立命館大学国際関係学部准教授)

A Study of English Education for Nurturing Japanese University Students as *Global Jinzai* and Variety in English as an Acquisition Target

Today, various types of English are used in international settings. This fact led Canagarajah (2007) and many others to contend that English learners' acquisition target should not be restricted to the varieties spoken in native English-speaking countries, and that learners need to develop an English ability that is capable of coping with the diversity of English and its users. Currently, learners are expected to accommodate this goal if they wish to be a member of the international society; this also applies to Japanese university students. Aiming to examine their attitude to the diversity of English and its users, a pilot study was conducted in 2018. In this study, students were asked the following questions: 1) Do they want to be global *jinzai* who are able to work successfully in international settings in English? 2) Do they need to possess English abilities enabling them to cope with the current situation in which various types of English are used? 3) Have they heard and/or read English which is not American or British? 4) Should an EFL textbook include linguistic information about various types of English? and 5) What is necessary in order for people to be able to understand various types of English? This paper will introduce the results of this study, and discuss what kind of changes should be made in English language education to help students equip themselves with the ability to cope with various types of English and its users. Moreover, this paper will examine what is an appropriate target variety for Japanese university students who wish to be global *jinzai*, because their target should not be restricted to the varieties spoken in native English-speaking countries; Japan is a member of a global society where people from various backgrounds interact with each other in English.

(IGARASHI, Yuko, Associate Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)